



在宅認知症高齢者の主たる介護者の介護負担感と 家族機能との関係について

—家族機能システム評価 (FACESKG) を用いて—

Relationship between family functioning and burden experienced by primary caregivers of elderly persons with dementia: An investigation using the family adaptability and cohesion evaluation scale (FACESKG) developed at Kwansei Gakuin

藤原和彦¹⁾ 上城憲司¹⁾ 小松洋平¹⁾

江渡 文¹⁾ 菅沼一平²⁾

KAZUHIKO FUJIWARA¹⁾, KENJI KAMIJOU¹⁾, YUHEI KOMATSU¹⁾,
AYA EDO¹⁾, IPPEI SUGANUMA²⁾

要旨: 本研究の目的は、在宅認知症高齢者の主たる家族介護者に対し、家族システム評価尺度 (FACESKG-16) を用いて、家族機能と介護負担感との関係性について明らかにし、今後の家族支援のあり方について考察するものである。調査の結果、家族機能3群間 (極端群・中間群・バランス群) で介護負担感の得点に有意差が認められた。また、極端型の介護負担感の得点が最も高かったことから、家族機能が極端型に含まれる家族介護者への家族支援が重要であることが考えられた。以上より、在宅認知症高齢者の家族介護者への支援は、家族機能の評価の必要性が示され、極端型の家族介護者への優先的な介入の必要性が示された。

Abstract: The purpose of this study was to analyze family support, through the elucidation of the relationship between family functioning and caregiver burden, using the Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scale (FACESKG-16) developed at Kwansei Gakuin to assess the primary family caregivers of elderly persons with dementia. Results show that a significant difference in caregiver burden scores was observed among three groups (extreme, intermediate, and balanced) that were divided according to family functioning. Furthermore, since the highest caregiver burden scores were observed in the extreme type family functioning group, it was considered necessary to provide family support to the caregivers included in this group. The results suggested that it is necessary to assess family functioning for supporting family caregivers of the demented elderly, and suggested the importance of prioritized intervention for family caregivers who belong to the extreme type family functioning group.

Key words: 介護負担 (caregiver burden), 家族機能 (family function),
認知症高齢者 (persons with dementia)

受付日: 平成22年10月5日, 採択日: 平成22年12月24日

1) 西九州大学 リハビリテーション学部

Faculty of Rehabilitation Sciences, Nishikyushu University

2) 今津赤十字病院 リハビリテーション科

Department of Rehabilitation, Imazu Red Cross Hospital

はじめに

近年、認知症高齢者の在宅介護に関連した事件がしばしば起こっているが、家族介護者の介護負担は深刻な社会問題となっている（高井 2004）。在宅認知症高齢者の家族介護者に関する研究は、米国の心理学者である Zarit らの研究が知られており、Zarit が最初に介護負担を定義したと言われている（荒井ら2000）。介護負担に関する要因は、認知症高齢者の症状、介護時間、介護期間、続柄、家族介護者の経済状況、副介護者の有無など多くの要因が挙げられ関連性について検討されている（結城ら1996）。わが国では、新名（1991）が Lazarus らのストレス認知理論をもとに、在宅認知症高齢者を介護する家族介護者のストレスモデルを提唱している。このモデルは、介護場面で生じるさまざまな出来事を潜在的ストレスラーとして捉え、家族介護者がこのストレスラーを否定的なものであると認知的評価（負担感）をすることによって、心理的・身体的症状が生じ、そのストレスラーやストレス症状に対処するために、家族介護者がコーピングを行うというものである。更に、家族介護者の基本属性や特性（性別・年齢・人種・患者との関係・パーソナリティなど）や家族介護者の持っている外的・内的リソース（知識・体力・ソーシャルサポート・ソーシャルネットワークなど）が影響しているというものである。先行研究（小澤2006、広瀬ら2007）では、副介護者の有無や介護協力者の有無など、ソーシャルサポートの要因として挙げられ介護負担との関連について検討されているが、これらの要因だけで家族機能を捉えるには不十分であると考えられる。そこで、本研究では、最も身近なソーシャルサポートの要因である家族機能に照準を絞り、在宅認知症高齢者の主たる家族介護者に対し、家族システム評価尺度（FACESKG-16）を用いて、家族機能と介護負担感との関係性について明らかにすることで、家族支援のあり方を考察することを目的とした。

研究方法

1. 調査対象

A県B市の重度認知症患者デイケア（以下認知症デイケアと略す）を利用する認知症高齢者を在宅で介護している主介護者の139名のうち、全てに有効な回答が得られた90名を対象とした（有効回答率64.7%）。

2. 調査方法

調査方法は、質問式によるアンケート調査を実施した。実施方法は、認知症デイケアに通う認知症高齢者を在宅で介護している主たる介護者に対し、留め置き調査法で実施した。

3. 調査項目

1) 家族介護者に対する評価

①家族介護者の基本属性

家族介護者については、年齢、性別、介護期間、副介護者の有無、続柄について尋ねた。

②家族機能評価

家族機能の測定は、デイビット・H・オルソンの円環モデルに基づいて立木ら（1999, 2002）が、開発したFCAESKG-16を使用した。本尺度は、成人を対象とした実証研究により信頼性と妥当性が確認されている。この尺度は、家族機能を「かじとり」と「きずな」の二次元に分類し、ものごとの決め方に関する「かじとり」の質問と、家族の結びつきに関する「きずな」の質問各8項目ずつを、「はい」「いいえ」で回答するものである。さらに、「はい」にあたる項目の得点を合計し、サーストン法により－8点～8点で示される。「きずな」の度合いは、家族成員の情緒的なつながりのことで、低い方からバラバラ・サラリ・ピッタリ・ベッタリの4段階に分類される。「かじとり」の度合いは、家族間の役割関係やルールに対して柔軟に変化させる能力のことで、低い方から融通なし・キッチリ・柔軟・てんやわんやの4段階に分類される。円環モデルでは、両次元とも中央に位置する場合をバランス型と呼び、両次元とも最も外側に位置する場合を極端群としている。さらに、両者の中間に位置するものが、中間群としているのが特徴である。例えば、かじとりは、「融通なし」（－2未満）、「キッチリ」（－2以上, 0未満）, 「柔軟」（0以上, 2未満）, 「てんやわんや」（2以上）となり、きずなも同様に、「バラバラ」（－2未満）, 「サラリ」（－2以上, 0未満）, 「ピッタリ」（0以上, 2未満）, 「ベッタリ」（2以上）で判定する。家族システム円環モデルを図1に示した。円環モデルでは、きずなとかじとりの組み合わせで家族システムを評価する。きずなとかじとりがともに中程度にある状態を家族システムのバランス型と定義し、家族が機能的であるとされている。

③介護負担感

介護負担感の測定は、Zarit 介護負担尺度日本語版

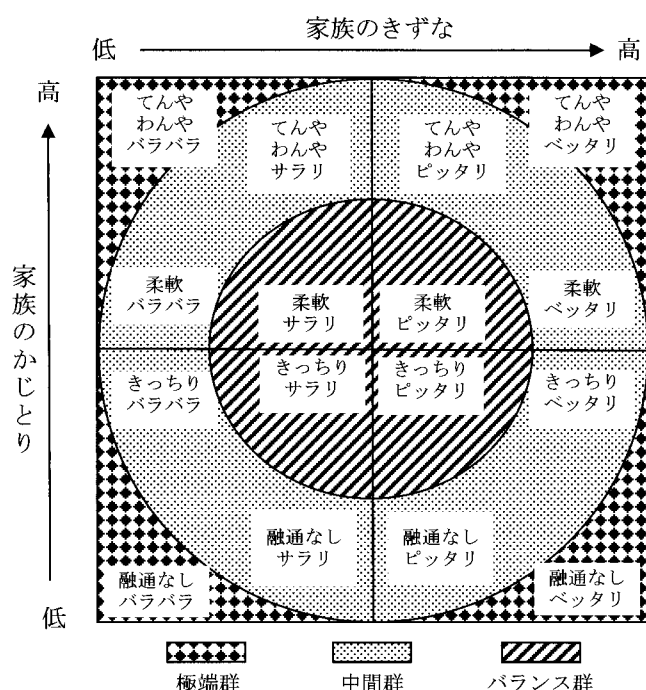


図1 家族システム円環モデル

(Japanese edition-Zarit caregiver burden interview:J-ZBI)を用いた。この尺度は、全22項目から構成され、第1から21項目は、家族介護者の心身の健康状態や経済的負担、社会生活常の制約、被介護者との関係を質問している。第22項目は「A signal global burden」とさせる介護負担感全体を示す項目になっているのが特徴である。「0. 思わない」、「1. たまに思う」、「2. 時々思う」、「3. よく思う」、「4. いつも思う」の5件法で回答するもので、得点が高いほど介護負担感が高いことを示す。

2) 認知症高齢者に対する評価

被介護者については、年齢、性別、認知症の重症度について測定した。認知症重症度は、Clinical Dementia Rating（以下CDRと略す）を用い測定した。

4. 倫理的配慮

各医療施設及び、サービス事業所の管理者に研究の主旨を説明した。対象者に対しては、調査協力の有無によって、個人が不利益にならないことを説明し、研究以外にデータを使用しないこと、プライバシーの保護について説明し、同意を得た。

5. 分析方法

家族機能の測定は、家族システム評価（FACESKG-16）により極端型・中間型・バランス型の3群に分類した。認知症重症度の測定は、CDRを用いて測定し、CDR

0.5とCDR1を「軽度群」、CDR2を「中等度群」、CDR3を「重度群」の3群に分類した。また、家族機能および認知症重症度の介護負担感の得点との比較を行うため、一元配置の分散分析を行い、その後、Bonferroniの多重比較検定を実施した。統計処理には、SPSS13.0 j for Windowsを使用した。また、データの表記については平均±標準偏差で示した。

結果

1. 対象者および認知症高齢者の基本属性について（表1）

表1 対象者の属性（家族介護者）

	項目	n (%)
性別	女性	68 (75.6)
	男性	22 (24.4)
続柄	娘	31 (34.4)
	嫁	23 (25.6)
	息子	14 (15.6)
	妻	13 (14.4)
	夫	9 (10.0)
介護期間	～半年未満	12 (13.3)
	半年以上～1年未満	7 (7.8)
	1年以上～3年未満	28 (31.1)
	3年以上～5年未満	18 (20.0)
	5年以上～9年未満	21 (23.3)
	9年以上～	4 (4.4)
介護協力	有り	48 (53.3)
	無し	42 (46.7)
		平均±標準偏差
年齢	全体	58.6±10.8
	女性	57.1±9.0
	男性	63.3±14.3

1) 家族介護者の属性

主たる介護者は、女性68名（75.6%）であり、男性22名（24.4%）であった。続柄は、娘31名（34.4%）と最も多く、夫9名（10.0%）と最も少なかった。介護期間については、1年以上～3年未満が28名（31.1%）と最も多かった。介護協力の有無は、有り48名（53.3%）であり、無し42名（46.7%）であった。年齢は、女性57.1±9.0歳、男性63.3歳±14.3歳であり、男性の方が高かった。

2) 認知症高齢者の属性

認知症高齢者については、女性67名(74.4%)であり、男性23名(25.6%)であった。CDR(認知症重症度)別の分布は、CDR0.5が6名(6.7%)、CDR1が30名(33.3%)であった。また、CDR2が37名(41.1%)、CDR3は、17名(18.9%)であった。年齢は、女性81.8±6.1歳、男性80.9±8.4歳であった。

表2 認知症高齢者の属性

項目		n (%)
性別	女性	67 (74.4)
	男性	23 (25.6)
CDR	0.5	6 (6.7)
	1	30 (33.3)
	2	37 (41.1)
	3	17 (18.9)
		平均±標準偏差
年齢	全体	81.6±6.7
	女性	81.8±6.1
	男性	80.9±8.4

2. 介護負担感について

認知症高齢者の家族介護者の介護負担感は、平均41.0±13.8点であった。

3. 家族機能および認知症重症度別にみた介護負担感との関係について(表3)

表3 家族機能の群別および認知症重症度別にみた介護負担感との関係

項目	n (%)	介護負担感の得点
家族機能	極端型 14 (15.6)	46.9±11.8
	中間型 61 (67.8)	42.4±12.6
	バランス型 15 (16.7)	29.9±15.0
CDR	軽度 36 (40.0)	40.7±13.0
	中等度 37 (41.1)	40.7±13.7
	重度 17 (18.9)	42.2±16.0

* $p<.05$ ** $p<.01$

家族機能の評価は、極端型14名(15.6%)、中間型61名(67.6%)、バランス型15名(16.7%)であった。また、認知症重症度については、軽度群36名(40.0%)であり、中等度群37名(41.1%)、重度群17名(18.9%)であった。家族機能の3群別にみた介護負担感の関係は、3群間に有意差が認められた($F=7.339$, $p=$

0.001)。また、家族機能の3群別の介護負担感の得点については、極端型の得点が46.9±11.8と最も高く、次いで中間型の42.4±12.6点であり、バランス型が29.9±15.0点と最も低かった。さらに、家族機能の極端群とバランス群間、中間群とバランス群間の介護負担感の得点に有意差が認められた。認知症重症度と介護負担感の関係は、重症度の3群間に介護負担感の得点の有意差は認められなかった。

考 察

本研究の目的は、在宅認知症高齢者の主たる家族介護者に対し、家族システム評価尺度(FACESKG-16)を用いて、家族機能と介護負担感との関係性について明らかにし、今後の家族支援のあり方について考察するものである。介護負担感を家族機能の3群間を比較した結果、極端群とバランス群間、中間群とバランス群間に有意差が認められ、特に極端群の介護負担感が高いことが示された。

1. 家族機能別にみた介護負担感との関係

家族機能の3群間の介護負担感の得点に有意差が認められ、極端群とバランス群、中間群とバランス群間の介護負担感の得点に有意差が認められ、家族機能によって介護負担感の得点が変わることが示された。佐伯(2006)は、被介護者にとって、最も身近なソーシャルサポートとして家族を考えると、主介護者と被介護者との関係、副介護者の有無などの断片的な要素だけでなく、家族全体が持つ機能に注目する必要があると指摘している。このことから、認知症高齢者の家族介護者への家族支援をする際は、ソーシャルサポートの重要な要因として、家族機能の評価を行うことが必要であると考えられた。

2. 認知症重症度別にみた介護負担感との関係

認知症の重症度別では、介護負担感の得点の差が見られなかった。鹿子ら(2008)は、介護における負担感、被介護者の状態だけではなく、家族介護者の主観的客観的な因子が相互に影響し合い変化すると指摘している。認知症重症度は介護負担感を強める要因ではあるが、本研究の対象者において、家族介護者のパーソナリティや家族環境などの家族側の要因が介護負担感に大きく影響している可能性が示唆された。

3. 家族機能と家族支援について

本研究では、家族機能の群別に介護負担感の得点に有意差が認められ、極端型の得点が最も高く、家族機能の群別により介護負担感が異なることが示された。上城ら（2008）は、家族機能を考慮しながら家族介護者のタイプによって対応を変化する必要があるとしている。以上より、介護負担感の得点が高いと予測される「極端群」に含まれる家族介護者への優先的な介入が重要あると考えられた。

本研究の限界

本研究は、A県のB施設にある認知症デイケアに通う認知症高齢者を介護する主たる家族介護者を対象に実施した横断的研究である。本研究では、認知症高齢者の家族介護者に対する家族機能評価の必要性を示すことができたが、介護負担感と家族機能との関係性については、示すことができなかった。今後、縦断研究を通じて家族機能の変化と介護負担感との関連を検討する必要があると考える。

謝 辞

本研究の調査にご協力くださいました認知症デイケアを利用されている皆様、ご家族の皆様調査に協力いただいた施設スタッフの皆様に心より御礼申し上げます。

文 献

- 荒井由美子ら（2003）Zarit 介護負担尺度日本語版の短縮版（J-ZBI-8）の作成—その信頼性と妥当性に関する検討—。日本老年医学会雑誌40(5)：497-503。
- 荒井由美子、杉浦ミドリ（2000）家族介護者のストレスとその評価法。老年精神医学雑誌11(12)：1360-1364。
- 広瀬美千子ら（2007）家族介護者の介護に対する認知的評価のタイプの特徴—関連要因と対処スタイルからの検討—。老年社会科学29(1)：3-12。
- 上城憲司ら（2008）重度認知症デイケアにおける在宅介護とその背景—1年後の家族機能（FACESKG）の変化—。作業療法福岡：13-17。
- 鹿子供宏ら（2008）アルツハイマー型老年認知症患者を介護する家族の介護負担に関する研究—介護者の介護負担感、バーンアウトスケールとコーピングの関連を中心に—。老年精神医学雑誌19(3)：333-341。
- 新名理恵（1991）在宅痴呆性老人の介護者負担感—研究の問題点と今後の展望—。老年精神医学雑誌第2(6)：754-762。
- 小澤芳子（2006）家族介護者の統柄別にみた介護評価の研究。日本認知症ケア学会雑誌5：27-34。
- 佐伯あゆみ（2006）認知症高齢者を介護する家族の家族機能および家族システムが主介護者の介護負担感に及ぼす影響。

日本赤十字国際看護大学紀要5：55-62。

- 杉浦圭子ら（2007）家族介護者における在宅認知症高齢者の問題行動由来の介護負担感の特性。日本老年医学会雑誌44(6)：717-725。
- 高井純子、金川克子（2004）在宅要介護高齢者の家族介護者のコーピングタイプとその特徴。老年看護学18(2)：73-80。
- 立木茂雄（1999）家族システムの理論的・実証的研究 オルソンの円環モデル妥当性の検討。川島書店：29-34。
- 立木茂雄（2002）家族システム評価尺度 <http://tatsuki-lab.doshisha.ac.jp/statsuki/faceskg/facesinde.html>
- 結城美智子、飯田澄美子（1996）在宅要介護高齢者の介護者における家族・身内とのかかわりと介護負担感との関連。老年看護学1(1)：42-54。